詩と主題

ーシェイクスピアのソネット59番と「不滅化のテーマ」—

内　藤　亮　一

シェイクスピアの『ソネット集』において，詩作とは友人を「時」を超えて不滅化する手段である[1]。しかし詩による友人の不滅化は最初から最後まで自信を持って為されているわけではない。むしろ『ソネット集』は詩による友人の不滅化に対する詩人の目覚め，自信，疑問，皮肉に至る過程を示している[2]。そしてソネット59番は自信が疑問に変わる転換点にあたる[3]。59番は主題の詩作に対する優位と主題の表現不可能を論じている。これが詩による不滅化に対する詩人の見方を変えさせ，以後のソネットに影響を及ぼしていくのである。本稿は通常は不滅化の詩に含まれていない59番が詩による不滅化をテーマにしたソネット群に与えた意義を明らかにしようというものである[4]。

順序として，59番までの詩による不滅化を見てみる。これは詩による不滅化に目覚めてからそれに大きな自信を持つまでの過程にあたる。この詩による不滅化に対する目覚めはもう一つの不滅化の手段である子供による方法抜きでは起こりえない。何故ならば詩による不滅化は子孫による不滅化に使われる比喩を介して目覚めさせられるからである。それが15番の次の部分である。“And all in war with Time for love of you,/As he takes from you I engraft you new” (13-14)[5].“engraft” はもともと「接木する」という意味であるが，そこから比喩として「詩を作る」という意味にも「子を作る」という意味にもなる。しかし15番を独立して読めば，14番までの結婚ソネットのコンテクストではむしろ

「生殖」の比喩にとる方が自然ですらある。15番の "engraft" が「詩作」の意味になるのは16番の "But wherefore do not you a mightier way/Make war upon this bloody tyrant Time,/…With means more blessèd than my barren rhyme?" (1-2,4) から戻って読み直した場合であり，その時15番で詩による不滅化が歌われていたのだとわかるのだ(6)。しかしこれはあくまで目覚めとでも呼んだほうがよいのである。16番に示されているように，詩作による不滅化より子孫による不滅化の方が強力だからだ。

17番になると「生殖」と「詩作」には友人を不滅化するための相互協力の関係がある。

Who will believe my verse in time to come?
If it were fill'd with your most high deserts—…
But were some child of yours alive that time,
You should live twice—in it and in my rhyme. (1-2,13-14)

詩は「地上の顔」を超越した友人の顔を描ききる表現力を持っており，それ故，もし詩だけが残れば詩と友人の両方を誰も信じなくなる状況が起こりうる。だから友人の面影を少しでも持っている子供を残していけと言うのである。子供を残すのは詩による不滅化のためであり，それだけ詩人は詩による不滅化に自信を持ってきたのである。

17番がまだ詩による不滅化と子孫による不滅化の両方を駆使しようとしていたとすれば，18番は二つの方法の融合から転換を示す。それは12行目の "in eternal lines" の二重の意味から生ずるものであって，この言葉の意味の転換が方法の転換を暗示する。

But thy eternal summer shall not fade
Nor lose possession of that fair thou ow'st,
Nor shall Death brag thou wander'st in his shade,
When in eternal lines to time thou grow'st:
So long as men can breathe or eyes can see,
So long lives this, and this gives life to thee. (9-14)

“eternal lines” は12行目まで読んだ時点ではまだ「永遠に続く家系」の意味にとれるし，17番までの「子孫繁栄」を勧めるソネット群のコンテクストではその方がむしろ自然かもしれない。しかし読み終わる時点で14行目の “this” を18番の詩自体を指すととれば12行目の “eternal lines” は「永遠に続く詩」という意味になる。この “lines” に二つの意味が内包されていた折には「子孫による不滅化」もまだ歌われていたと考えられる。それが14行目で「詩作による不滅化」に変わってしまうのである。そして18番における「詩作による不滅化」も主題は夏の日より美しく，詩もその美しい友人に永遠の生命を与えるという理想的な主題と詩作の結合であるといえる。しかし “this” (18.14) という代名詞ではまだ完全に「詩」の意味かどうか不明である。19番になってやっとはっきりと “verse” (14) と明示されることになる。

15番から19番まではいわば「詩による不滅化」の観念が「子孫による不滅化」の観念に取って代わる過程といえよう。しかし19番では主題と詩の調和は18番のような調和状態ではなく，滅んでいく友人を自分が救うといきり立つ詩作の側の一方的な主張が目立つのである。その意味では「詩」が主題の友人より優位に立っている。

Oh carve not with thy hours my love's fair brow,
Nor draw no lines there with thine ántique pen;
Him in thy course untainted do allow
For beauty's pattern to succeeding men.
Yet do thy worst, old Time: despite thy wrong
My love shall in my verse ever live young. (9-14)

詩と主題の幸福な結合は38番に再び見いだされる。詩による不滅化は友人が主題を与え，詩人がそれで詩を書くという協同作業である。

How can my Muse want subject to invent
While thou dost breathe that pour'st into my verse
Thine own sweet argument,…
And he that calls on thee, let him bring forth

Eternal numbers to outlive long date.　　(1-3,11-12)

しかし "While" (2), "When" (8)という接続詞が暗示するように現実のことより，むしろ詩による不滅化の理想的状態がいかなるものかを歌っている。

55番は不滅化のテーマを扱った詩の中で最も自信に満ちた詩である。一行目から "Not marble, nor the gilded monuments" と否定形を重ねることによって全てに優る "this powerful rhyme" (2)の力強さが強調されている。しかし詩と主題の間の関係には変化がみられる。17, 18, 38番には両者の相互依存があった。15, 19番では，「時」によって滅び逝く友人の描写が中心で「詩」による不滅化はカプレットでそれと対比された形で示された。一方，55番は詩による不滅化自体を歌う。主題である友人は詩による不滅化の対象でしかなく，友人の不滅化よりも詩による不滅化の面が強調され，自信の頂点に達している。

ここで，ソネット59番は，新しい観点を導入する。59番は55番とは逆に詩作では主題を十分表現できないと主張するのである。59番を少し詳しく分析してみよう。

59

If there be nothing new, but that which is
Hath been before, how are our brains beguil'd,
Which labouring for invention bear amiss
The second burthen of a former child!
Oh that recórd could with a backward look
Even of five hundred courses of the sun
Show me your image in some ántique book
Since mind at first in character was done!—
That I might see what the old world could say
To this composèd wonder of your frame,
Whether we are mended, or whe'er better they,
Or whether revolution be the same.
　　Oh sure I am the wits of former days

To subjects worse have given admiring praise.

59番は詩作と主題に関する詩であり，それに絡んだ幾つかの問題が第３クォートレインまでに提出され，カプレットが解答を与える。第１クォートレインで第一の問題が提出される。それは「新しいもの」を達成しようとして苦労しても，我々には以前作られた詩の繰り返ししか作れないという問題である。しかしこの以前作られた詩というのが詩人自身が以前に作った詩を指すのか，過去の詩人が作った詩を指すのかははっきりしていない。１－２行の「新しいものはなにもなく，今在るものは以前にも在った」という一般事象を述べた仮定を引き継いでいるとすれば過去の詩人の詩を指すと考えられる。従って問題となっているのは詩人の独創性ということになる。一方，一般命題から個人的な問題に急に移行したとすれば，自分の詩を指すことになる。その場合ソネット連作もそろそろ種が尽きはじめマンネリになってきたのであり，詩人の発展性に対する問題提起だといえる。従って第１クォートレインは詩人と詩作に関するこの独創性と発展性の二種類の問題点を蔵しているのである。

しかし，第２クォートレインになると詩人の関心は過去の詩人の描いた友人の似姿に移行する。ということはここでの詩人の問題意識は詩人の独創性の方に向いている。しかし第２クォートレインの問題意識は詩人のみならず主題である友人の独自性にまで広がる。なぜならば“your image”(7)は単に過去の詩人も現代と同じような美を描いていたという意味のみならず，かつてにも友人と同じぐらいの美を持った人物がいたことを意味するからだ。尤も第１クォートレインにおいても友人の独自性の問題は既に含まれていたのである。冒頭の“If there be nothing new”は勿論，“The second burthen of a former child”(4)という詩作の繰り返しを意味する比喩も，字義どおりの意味を思えば友人の独自性に関する問題をはらんでいたといえる。しかしこの繰り返しと独創性に関しては第２クォートレインはさらに新たな問題を提出する。つまり繰り返しとは厳密な循環を意味するのかあるいは似たようなものが必ずあることを意味するのか，という問題を持ち出すのである。第１クォートレインにおいてもこの問題はあったわけだが，それがはっきりと意識させられるのは，友人の似姿を見

るのに500年戻るということが第２クォートレインで言われるからである。「500年」という期間はすべてのものが繰り返される「大年」の周期に近く，ストア派の歴史循環思想へのアリュージョンと受け取れる(7)。さらにD. ウィルソンが指摘するように59－74番がオウィディウスの『変身物語』の第15巻を反映しているならば(8)，「500年」とはそこで言及されている不死鳥の死と復活の周期の期間である(9)。そうすると先の "your image" も文字通り500年前の友人自身の姿を意味することになる。しかしこの循環思想は一旦意識化された上で8行目までくると否定されることになる。「精神が初めて文字に記されて以来」とあるように直線的歴史観がここで導入される。従って繰り返しとは似たものがあるの謂となる。さらにこの直線的歴史観は循環思想の払拭のみならず，第３クォートレインにおける９－11行の古今の対立という新たな問題を際立たせる役目をはたす。ここでは独創性の問題は優劣の問題に吸収され置き換えられるのだ。しかし何の優劣かということになると，それが詩人の詩であるのか主題であるのかという点は依然として明確でない。というのも９－10行目の "what the old world could say/To this composèd wonder of your frame" は４通りの解釈が可能でありそれが古い世界の現代に対する詩と主題のいずれの優劣の基準にもなりうるからである。すなわち，1）古い世界が友人に対して自分の主題と比べてなんと批評するか。2）友人についてどの程度の出来の詩を書きうるか。3）詩に描かれた友人を見て自分の主題と比べてなんと批評するか。4）現代の詩についてなんと批評するか。１と３の解釈なら，11行目で問われているのは主題の優劣となり，２と４なら，詩の優劣になる。この問題設定のあいまいさは故意になされているのであり，それによって問題点を増やしかつ読者をカプレットまで緊張させたまま導こうというのである。12行目の "whether revolution be the same" がまさしくそのことを冒頭の仮定を再び「繰り返す」ことで為し遂げている。ここで優劣だけでなくすべては大差ないという観点もあることを思い出させられる。さらに "revolution" には「変転」の意味のほかに「大年の周期」の意味がある故に循環思想も再び思い出されることになる(10)。以上の，詩人と詩作の独創性，発展性，友人の独自性，循環思想，

古今の優劣という問題点にたいする解答としてカプレットは読まれることになるのだ。

しかし，カプレットは昔の才人が劣った主題を賛美していたという詩人の確信を示すにとどまる。これは第3クォートレインの主題の優劣に関する解答にはなっている。しかし詩の優劣に関する解答にはなっていない。幾つかの推測は可能である。まず第一に昔の詩人が劣った主題について書いたのならば当然詩も劣っていたであろうという推測ができる。しかし昔の詩人が贈ったという“admiring praise”は昔の詩人が主題に「驚嘆した賛美」という意味に加えて，我々を「驚嘆させるほどの賛美」という意味であり昔の詩人の優れた力量を示すことになる。あるいは主題が劣っているにもかかわらず現代に劣らぬ詩を書いているから「驚嘆させるほどの賛美」だと言ったとも考えられる。

つまるところはっきりした解答はでないのであり，むしろ故意に解答を回避したと考えたくなる。つまりカプレットは詩の優劣よりも主題の優劣に焦点を絞ったのである。ではそのことは何を意味することになろうか。まず単純に考えれば詩の優劣は分からなくとも主題である友人の優位ははっきりしているという詩人の友人へのお世辞である。しかしそれは同時に主題同士の優劣を問題にしているのではなく，詩作と主題である友人の優劣も問題にしているのだといえる。そして焦点を主題に移行させることで主題の問題の方が詩よりも重要であることを示す。さらに優劣の分からない詩作に比べて主題の方は優劣がはっきりしているということは，卓越する力において友人は詩人の詩を凌駕しているということになる。従ってカプレットは詩人の詩作及び昔の詩人の主題である麗人の両方に対する友人の優位を主張していることになるのだ。古今の優劣が詩に関するのか主題に関するのかあいまいにしていたのは先に述べたように緊張をカプレットまで持続させるためだけでなく，最後で詩と主題の比較をするための仕掛けだったのである。またカプレット冒頭の“Oh”という感嘆は友人の卓越性に向けて発せられたのみならず，その卓越性に比した自己の詩の貧弱な成果に向けて発せられたものでもある。ここで第1クォートレインの詩人の発展性に対する問題提起は主題に対する自己の詩の貧弱さを嘆いたとこ

ろから出されたものであったことが判明する。従って第3クォートレインまでの問題の解答としてカプレットは詩人の発展性を否定し，昔の詩に対する優位についてははっきりさせない。そして友人の独自性と優位を肯定している。そのことはさらに詩が主題を表現しきれないことを示唆するのである。

では残りの詩人の独創性と循環思想に関してはどうかというと，それはカプレットの構文を読みかえることで解答が現われる仕組みになっている。まず "sure" を *OED* により文全体を修飾する副詞 "assuredly" と取る。次にクォート版13行目の末尾の読点を文の切れ目と取る(11)。13, 14行目の主語を "I" と取る。そうすると通常の読みの "I am sure that the wits of former days have given admiring praise to subjects worse" ではなく "Assuredly I am the wits of former days and I have given admiring praise to subjects worse" となる。つまり「私」が「昔の才人たち」ということになり，「才人たち」と複数になっているのは過去に繰り返し現われたことを示す。つまり循環思想が肯定されているのである。それに伴い詩人の独創性は否定される。そして繰り返されないのは友人だけであるのだからここでも友人の独自性と卓越性が主張される。その点でカプレットのもう一つの読みと矛盾していない。そして以上のごとくカプレットはすべての問題の解答となっているのである。よってカプレットの解答をまとめると，59番は，詩人の独創性，発展性，古今の優劣を否定し循環思想，友人の独自性，卓越性を肯定していることになる。

詩人に独創性，発展性がないのに，主題の友人は卓越した存在であることからは，詩人は主題である友人を十分表現できないという結論に達せざるをえない。主題を表現できないことは詩と主題の調和を否定することになるから17, 18, 38番の詩による不滅化の否定になる。また詩人の独創性，発展性の否定は，「詩」の「時」に対抗する力を否定することにもなるから，19, 55番の否定になる。59番はさらに詩による不滅化の否定を隠している。クォート版では12行目の "same" の 's' は長字の 's' であり，'f' との視覚的な掛詞になっているため，"revolution be the fame" の意味が隠されている。つまり「名声は変転する」のであり，名声を頼みとする詩による不滅化は土台を覆されることになる。

以上から判断すればソネット59番はそれまでの不滅化の詩に対して三つの問題点を提起していると思われる。1）詩人に独創性はない。2）詩によって獲得した名声など所詮変転する。3）詩などでは主題を表現しきれない。そして一旦59番が問題点を提出した以上は，59番以降のソネットはそれらの否定か克服をしなければいけなくなるはずである。以下59番で出された問題点をいかに詩人がライヴァル・ポエム群の中で逆利用して自己弁護に用いていくかを見てみたい。

まず59番の影響を受けた76番を考察する。

76

Why is my verse so barren of new pride,
So far from variation or quick change?
Why with the time do I not glance aside
To new-found methods and to compounds strange?
Why write I still all one, ever the same,
And keep invention in a noted weed,
That every word doth almost tell my name,
Shewing their birth and where they did proceed?
Oh know, sweet love, I always write of you,
And you and love are still my argument;
So all my best is dressing old words new,
Spending again what is already spent:
For as the sun is daily new and old,
So is my love still telling what is told.

59番で昔の詩人との優劣が問題にされていたのに対してここでは同時代の詩人との優劣が問題にされており，第1クォートレインは詩人の詩が時代遅れであることを提示する。詩人の発展性の無さが批判されているのだ。それに対して詩人は常に友人について書いているから変化がないと答える。つまり詩が同じものになるのは詩人の忠誠心と友人の節操の表われと言っているのである。詩

人に発展性がないという問題を76番は長所に変えることで克服しているのだ。時代遅れになることで名声を喪失することなどは取るに足らない。何故ならば，5行目の "Why write I still all one, ever the same" の 'same-fame' の掛詞を読みとれば，一つのことだけを書くことこそ永遠の名声だからだ。カプレットは，11－12行と合わせて，太陽が実体は一つなのに出没の位置だけを変えて，日々再生するのと同じように自分の愛も同じ言葉の繰り返しだが配列を変えることで，太陽のように永遠に再生すると述べている。「太陽の運行」は "revolution" であることから59番の "revolution be the fame" は「太陽の運行，すなわち，詩の繰り返しこそ名声である」という意味に読み替えられる。

詩作は主題を表現できないという問題点を口実にライヴァル・ポエトのような詩が書けないという弁明をしているのが83番である。

I never saw that you did painting need,
And therefore to your fair no painting set;
I found－or thought I found－you did exceed
The barren tender of a poet's debt:　　(1-4)

しかし，"or thought I found" と言い直しているのはもちろん友人への厭味であり，言外にかつてほど友人が詩の対象として卓越していないことを匂わせている。つまり，詩によって主題を表現できないことが二重の意味を帯びてきている。主題の卓越性と堕落が裏表になっているのである。

84番は "you alone are you" (2)が最高の賛美だと言う。一つには，「君」は「君」という同語反復つまり繰り返ししか詩は為しえないことを意味し，一つには「君」は「比類なき者」であることを意味する。要するに詩人が主題を表現できないという59番の論理と同じである。しかしそれだけではない。76番は言葉の配列を替えることが詩人の最善策だったが，84番は配列を替える余地すら残していない。59番に始まった「詩作は繰り返しのみである」という状況が極限に近づいているのであり，友人を主題とした詩作の終焉を予言する。

従って詩では主題が表現できないということ自体が100－103番のソネットのテーマとなる。103番は一見詩人の筆力の貧弱なことを憂い，友人の描写は詩

より鏡の方が優れていると述べている。しかし詩による不滅化を不可能にした最大の原因はおそらく主題である友人の美の衰微である。第2クォートレインは主題である友人の変わり果てた姿を描き出す。

Oh, blame me not if I no more can write!
Look in your glass, and there appears a face
That over-goes my blunt invention quite,
Dulling my lines and doing me disgrace. (5-8)

"my blunt invention" は，鈍い詩的想像力，飾った言葉でない詩，という意味の他に主題の発見の鈍いことを意味し，主題の源である友人が衰微したため主題の発見に手間取ることを暗示している。一方，鏡は詩的想像力がないため，ありのままの顔を映し出す。それが詩人の詩を色あせたものとし，詩人に恥をかかせるのは鏡に現われた醜悪な顔が詩人のかつての主題だからである。詩による不滅化の障害は友人の堕落であったのだ。しかし，それでもなお表面的には主題を賛美した詩が書き続けられたのは，59番において詩作と主題の結合が解体され，詩では主題を表現できないという観点が導入されたからである。59番ではそれは主題の卓越性の表現であったが，その後のソネットでは自分の貧弱な詩の弁明となり，あるいは友人の堕落を隠蔽する表現になったのである。

以上のように，ソネット59番は詩作と主題の関係に対する見方を変革することで，59番までの「不滅化の詩」を否定し，それ以後のソネットの詩と主題の関係を一変する分岐点となっていたことが明らかになったと思う。

注

(1) 詩による不滅化のテーマはギリシャ以来の伝統であり，最初は個人の美徳や功績及び詩人自身が不滅化の対象であり，恋人は対象にならなかった。このテーマに関してはリーシュマンがピンダーからシェイクスピアまで辿っている。J. B. Leishman, *Themes and Variations in Shakespeare's Sonnets* (London: Hutchinson, 1961), pp. 25-91 を参照。

(2) 本稿はクォート版の順序に一貫性を認めて論を立てている。『ソネット集』の順序に関するこれまでの議論は，H. E. Rollins, ed., *A New Variorum Edition of The Sonnets*, vol. 2 (Philadelphia: Lippincott, 1944),pp. 74-116; Kenneth Muir, *Shakespeare's Sonnets* (London: George Allen & Unwin, 1979), pp. 6-13 を参照。

(3) ソネット・シークエンスにおける59番のこれまでの位置づけに関して，D. ウィルソンはオウィディウスの影響を受けた詩群（59-74）の最初の詩とし，ミュアは「時」をテーマとした詩群（59-75）の最初の詩としている。いずれにせよ59番とそれ以前の詩に切れ目を認めている。J. Dover Wilson, ed., *The Sonnets* (*Cambridge*: *Cambridge Univ. Press*, 1966), p. 162; Muir, p. 65.

(4) 例えばリーシュマンは不滅化の詩として，15，18，19，54，55，60，63，65，81，100，101，107，122番を挙げている。Leishman, p. 21. ただし，レヴァは「不滅化」の詩群として55，59，60，62-65，100-108，115，116，123-125番を纏めている。J. W. Lever, *The Elizabethan Love Sonnet* (London: Methuen, 1956), p. 246.

(5) ソネットの引用はすべて W. G. Ingram and Theodore Redpath, eds., *Shakespeare's Sonnets* (London: Hodder and Stoughton, 1964) による。

(6) Stephen Booth, ed., *Shakespeare's Sonnets* (New Haven and London: Yale Univ. Press, 1977), p. 158.

(7) Ingram and Redpath, p. 138.

(8) Wilson, p. 162.

(9) Publius Ovidius Naso, *The XV Bookes Entytuled Metamorphosis*, trans. Arthur Golding (Amsterdam:Theatrum Orbis Terrarum, 1977), p. 192. D. ウイルソン自身は「500年」は Pembroke 家への言及だとする Mary Suddard の説を紹介しているが，Mr. W. H. が William Herbert, 3 rd earl of Pembroke だという自説にこだわったためであろう。Wilson, p. 163. William Herbert 説は，Wilson, pp. xci-cvi.

(10) Frederick Turner, *Shakespeare and the Nature of Time* (Oxford: Clarendon Press, 1971), p. 183 に引用されている Loys le Roy, *Of the Interchangeable Course or Variety of Things in the Whole World*, trans. Robert Ashley, 1594 の中に "the revolution of the great year" という表現が見い出せる。

(11) クォート版は, H. E. Rollins, ed., *A New Variorum Edition of The Sonnets*, vol. 1. (Philadelphia: Lippincott, 1944) に転載されているものを参照。